

大谷さんとの思い出

鶴淵 誠 二

東京農工大学名誉教授

平成 27 年 11 月 19 日

「これから、プラズマ研に行くことになります…」。
インフォーマルミーティングでの出会いが最初である。ACE プロジェクトに引き続き、1977 年 4 月に NICE プロジェクトが発足し、本格的な共同研究がスタートした。金子・岩井両先生を代表とする NICE グループの仕事は 7 年間続いた。当時、阪大にいた私は、このプロジェクトに最初から参加できる幸運を得た。東京、名古屋、大阪、九州の各大学から定期的に若い研究者(当時は 30 代の助手)が集まり、多価イオンビームを用いた衝突過程の研究を夢見て、装置の開発・製作に取り組んだ。

学問の健全な発展には、価値観の多様性が不可欠であり、それを柔軟に許容する環境こそ必要である。当時のプラズマ研には、そのような雰囲気があった。大谷さんは、いろいろなキャラクターを持った若者の寄り合い所帯を、有機的に結びつけるのに大きな役割を果たした。グループ内では実験の翌日には、実験内容の総括、課題などをまとめた、手書きの「大谷メモ」をベースに、白熱した議論があった。緊張感の中にも充実感があり、NICE プロジェクトはパワフルに動いていった。

また、「良い研究成果はコンパの数に比例する」という金子の法則(?)が囁かれていた。そんな中、岐阜の「岡島築(やな)」に出かけたことがあった。そこでの鮎料理は実に美味かった。酒宴も深夜におよび、眠くなると、大谷さんから肩を叩かれ、「まだ、まだ」と言われたこともあった。また、西伊豆の安良里(アラリ)に出かけたときには、朝早くから船に乗り、下田沖で釣りをしたことがあった。ほとんど、何も釣れなかったが、小さなカサゴが一匹釣れたとき、大谷さんが、「花魁のかんざし

だよ」と教えてくれた。なるほど、うまいことを言うなと、今でも記憶に残っている。

proto-NICE では、磁場のないところから出た電子流を、進行軸方向に立ち上がっている磁場強度勾配の、どの辺りに打ち込むと、さらに圧縮効果が上がるかなどで苦労した。電磁遮蔽軟鉄の、ちょっとした設定位置の調整でグリアーできた。今となっては懐かしく想いだされる。NICE-I の心臓部に当たる 1m の超伝導コイルの製作も、その分野では素人の集団が試行錯誤をしながら、とにかく作り上げた。

1980 年の 12 月 23 日になり、念願の酸素原子の裸イオン $^{18}\text{O}^{8+}$ の引き出しに成功した($^{16}\text{O}^{8+}$ は H_2^+ と重なり区別できないので、 ^{18}O を用いた)。この直後の忘年会は、蟹を目指して福井の三国港に出かけた。ある種の達成感があり、想いで深い忘年会となった。いろいろな紆余曲折もあったが、共同研究は数々の新しい研究成果を生み出した。詳しいことは発表論文や「NICE 始末記抄」(大谷俊介、プラズマ研便り、Vol. 1, No. 6)をご覧ください。

大谷さんは 1990 年にプラズマ研から電通大に移り、新しい局面がスタートした。日英共同研究でオックスフォード大学を訪れる機会があった。「KINGS ARMS」という学生街のパブで、何種類ものビールを楽しみながら、遅くまで歓談したことがあった。パブの名前がなぜか印象的だった。

1999 年 7 月の仙台 ICPEAC では、開催のための資金が集まるかどうか、最大の心配事であった。そんな中、私は経理関係をやることになった。大谷さんは連日、精力的に企業や団体を回り、募金趣意書を説明して歩いた。金庫に入れる役目は大谷さん、私は、なるべく開けないようにする

役目で、緊張の日々が続いた。でも、開催直前には、ほっとする状態となった。さぞかし靴を何足か、すり減らしたことであろう。大谷さんの多才な一面を見た。もちろん、仙台 ICPEAC は大きな成功をおさめることができた。

2008年2月の国際共同研究事業 ICORP(多価冷イオンプロジェクト)の追跡評価会での大谷さんは、まだまだ輝いて見えた。

大谷さんは原子衝突研究以外の分野でも、「海外と文化を交流する会」の会長を務めるなど、文化交流にも情熱を注いでいた。2011年の4月には霊南坂教会でのチャリティーコンサートで、久しぶりに話し込んだ。また、一月後の5月には NICE 同窓会で NIFS の宿舎に泊まりこみ、想い出話に花を咲かせたが、心なしか寂しそうな横顔が見られた。

その頃、私は東邦大に非常勤講師として出かけていたが、酒井さんから「大谷さんは集中講義を無事にやり終えることができた」と聞いた。そのときは、少し体力が回復してきたのかなと思ったりもしたが、「ワインを薄めて飲んでいましたよ」には、不安を覚えた。時間の都合で、すれ違ってしまったことが悔やまれる。

大谷さんは、豊かな足跡を沢山残してくれた。言うまでもないことであるが、親子、兄弟、友人など親しい人と別れることは、本当に辛いものである。大谷さんとの別離は、私にとって大きな苦しみであった。